

## ☆スリランカの歴史

### ①スリランカの古代史

『…昔、ライオンを殺した勇者がいた。彼はベンガルの王女がインドの雄ライオンと結婚して産んだ子供である。その勇者の子孫がスリランカに到着してシンハラ王国を建設した。王国の名は、彼らの一族が‘Shinhala(ライオンを殺した者)’と呼ばれたためである…。

(6世紀に編纂された『マハーワンサ』の建国神話の一部)

紀元前3世紀には仏教がスリランカに普及し、ほぼ同時期に成立したシンハラ王国の時代には全島に仏教寺院が建築された。



聖地・キャンディの仏齒寺

### ②スリランカと「海のシルクロード」

インド洋に浮かぶスリランカは、古代から東西を結ぶ海の道(海のシルクロード)の重要なポイントであった。

仏教やヒンドゥー教、さらに9世紀頃にはイスラム教も伝来するなど、商品の交易がすすむことで人間の交流、さらには文化の交流がすすむこととなり、スリランカは東西文化の連結点として繁栄することとなった。

### ③ヨーロッパ人との接触、植民地化の時代

15世紀、ヨーロッパで始まった大航海時代は世界史を大きく変えたが、スリランカもまた例外ではなかった。

16世紀はじめ、まず最初にスリランカを訪れたのはポルトガル人であった。ポルトガル人はシナモンの独占を図って西南部を征服し、このあともマラッカ海峡から中国を経て、日本にまで到達することになる。



\* コロンボ市内に残るポルトガル時代の大砲

### ④イギリスの支配、植民地セイロンの時代

その後、スリランカの支配権はオランダ、さらに1796年にはイギリスに移る。イギリスは1815年にキャンディの王宮を占拠して全島の支配に成功する。イギリスはスリランカの開発を進め、各地にコーヒー・バナナ・ココナツのプランテーションを建設し、反抗するスリランカの人々を弾圧しながら大英帝国の植民地経済圏の一角としてスリランカへの支配を強化していった。さらに、19世紀の半ばには紅茶の生産が高原地帯でも始まり、イギリスの支配が島の細部にまで及ぶようになっていったが、そのことはスリランカの人々のナショナリズムを喚起することとなった。

## ⑤第2次大戦後の独立、そして現代スリランカの苦悩

第2次大戦後の国際社会は植民地の自治・独立への動きがすすんだ時代でもあった。

スリランカも1948年にまずはイギリス連邦の中の自治領となり、ついで1972年に共和国として独立を達成した。現在の国名が確定したのは1978年である。以後のスリランカは教育や福祉の充実、農業を中心とした産業の振興などを重視した政策をすすめている。しかし、現実のスリランカでは現在も大きな問題が存在している。それは、**北・東部の内戦**である。

★毎日新聞 8月19日社説

スリランカが内戦状態に逆戻りしている。多数派で仏教と中心のシンハラ人と、少数派でヒンズー教徒中心のタミル人が激しくぶつかり、昨年12月からの死者は併せて1000人を超えているものと見られる。4年前に発行した停戦協定はこれで有名無実化した。これ以上、民族間の紛争を繰り返してはならない。国際社会の介入を強めたい。

対立が激しさを増したのは昨年の大統領選でシンハラ民族主義生徒の支持を受けたラジャパクサ首相が当選したのがきっかけだ。北・東部を拠点にタミル人国家の建設をめざす反政府武装組織タミル・イーラム解放のトラ(LTTE)が敵対姿勢を鮮明にしたのである。政府とLTTEの内戦はこれまでの約20年間続いており、その間の死者約65,000人、避難民は実に80万人に上る。

今年6月には中北部のアヌラダプラで地雷によるバス爆破事件があり、LTTEは関与を否定しているがシンハラ人の女性と子供64人が巻き添えになった。7月には東部で政府支配地域の農業用水をLTTEが遮断したことで戦闘となり、政府軍による8月の北東部空爆では多くの女子生徒が巻き込まれてしまった。

日本はこれまでスリランカの和平には積極的に関わってきた。2003年にはスリランカ政府とLTTEの和平会談を箱根で開催し、スリランカ復興に関する東京会議を開催し、仲介役のノルウェーなどと連携して和平プロセスをうながしてきた。経済援助を通じて民族紛争を終わらせようという試みである。2年前のスマトラ島沖地震による津波でスリランカ全域が多大の被害を受けたときには、政府とLTTEの復興協力が図られ、和平につながるという期待感もあったが、復興作業の権限などを巡って対立が発生し、現在に至っている。

国際社会には失望感が広がっている。アメリカ・ヨーロッパ連合はLTTEをテロ組織として指定し、資産の凍結に踏み切った。LTTEは国内外で孤立化を深めており、それがかえって戦闘のエスカレートにつながるのではないかという心配がある。4年前の停戦協定にもう一度息を吹き込みたい。LTTEを競技のテーブルに引き戻し、武装組織の解散を求める方法が必要だ。日本に課せられた役割も大きいだろう。

★産経新聞 8月4日

AP通信によると、スリランカ政府軍と反政府組織「タミル・イーラム解放のトラ(LTTE)」との武力衝突が続くスリランカ北東部のムトゥールで3日、住民が避難していた学校などに砲弾が撃ち込まれ、少なくとも18人が死亡した。政府軍・LTTEの両方とも相手が打ち込んだと主張している。

## ☆現代スリランカ社会

### (1) 民族と宗教

スリランカは多民族社会であり、複雑な民族と宗教構成が現在の内戦の原因になっている。

宗教別人口比は仏教徒が70%、ヒンドゥー教徒が10%、イスラム教徒8.5%、キリスト教徒11%である。民族ごとの対比で見ると、シンハラ人は仏教徒、タミル人はヒンドゥー教徒が大多数を占めている。イスラム教徒は南インドやマレー半島からきたムーア人と呼ばれる人の比率が高い。



コロombo市内のイスラム寺院(お菓子の家みたいです)

### (2) スリランカの経済



内戦の影響もあって経済的には苦しい状態が続いている。食糧自給率は高いが、国民一人あたりの国民総生産額は2001年で810ドルでしかない(シンガポールは30.170ドル)。

農業はプランテーションが中心で輸出作物はほとんど欧米資本の支配下にあるので、政府としては現在のような農業依存体質のままでは経済構造の改善が困難であるので、観光や情報分野の発展をはかりたいところであるが、内戦が深刻化する中では難しい状況が続いている。

### (3) 日本とスリランカ

第2次世界大戦に際して、イギリス領であったスリランカにはイギリス軍基地が置かれていた。そのため、コロombo・トリンコマリーの二都市に日本軍が空襲をおこなったことがある。

その後、サンフランシスコ講和会議に際してスリランカのジャヤワルダナ代表(後に大統領)は、日本に対する賠償請求権を放棄し、参加国に対して寛容の精神で講和をすすめるように求めた。この時にジャヤワルダナ代表は世界諸国に対して仏陀の言葉『憎悪は憎悪によって止むことなく、愛によって止む (Hatred ceases not by hatred, but by Love)』を述べ、その後も大の親日家として日本とスリランカの関係改善に取り組んだ。

その後も、日本とスリランカの関係は良好である。JICAによって実施されるスリランカに対するさまざまな援助は、平和の定着と復興プロセスへの支援のほかに、中長期的なビジョンにもとづいたさまざまな援助(経済基盤の整備、外貨獲得能力の向上、貧困対策など)がおこなわれている。

現在でも具体的な人的支援をおこなうために多くの海外青年協力隊員、海外シニアボランティアなどがさまざまな分野で活動をおこない、スリランカの人々と生活をともにしながら社会の改善に向けて日々努力されている。

★スリランカ点描、いくつかの光景を見て…。

1



2



3



4



5



6

